

# ルソーにおける「歴史家」の問題

## 『エミール』における歴史家のフィギュールについて

淵田 仁

### I. 問題設定：ルソーの〈凡庸な〉歴史観

『エミール』のなかでジャン＝ジャック・ルソーは様々な教育的方法を提案している。運動、実験、農業、工作等々、多種多様な方法を用いて教師はエミールを有徳な自然人として育て上げようとする。その方法のなかには本稿で我々が検討する歴史も含まれる。歴史を通じた教育がエミールに施されるのは『エミール』第四巻においてであるが、ロランス・モルはこの箇所に関して「いわゆる歴史に対して、ルソーはモラリスト的観点からしか関心を寄せなかった<sup>1)</sup>」と評している。つまり道徳教育の一つの方法としてルソーのこのテクストが解釈されており、このような評価は多くのルソー研究において見ることができ  
る<sup>2)</sup>。

確かに『エミール』第四巻の当該箇所を一読すれば、歴史はエミールを道徳的に教化するための補助的な方法として用いられているに過ぎず、『エミール』は歴史に対する「凡庸な<sup>3)</sup>」視点しか有していないテクストであるという感想を読み手は抱くであろう。またそこで論じられる歴史とは、モンテスキュー やヴォルテールが取り組んだような風土、習俗を対象とする社会学的－哲学的歴史でも、ビュフォン的自然史でもなく、ヘロドトスやトゥキディデスらの「いわゆる歴史」である。この点においても、ルソーの歴史への関心は時代の思想潮流からすれば目新しいものであるどころか、古代趣味の表れと言えるだろう。

しかし本稿において我々は『エミール』において展開される歴史教育論の新たな読み方を提示する。すなわち『エミール』の歴史教育論は単なる道徳的教育の有用性を論じたものに留まらず、語りの〈方法〉を巡るテクスト、歴史の語り手である歴史家のフィギュールを巡るテクストとしても読める、ということを我々は示す。

もちろん「歴史 (histoire)」という語の多義性には注意を払わなければならない。というのも、当時のこの語にはいわゆる歴史以外の物語や肖像という意

味も含まれるし、通時的時間だけではなく共時性をも意味する言葉であるからだ。このような歴史の多義性を理解しつつも、本稿では歴史を〈過去に起きたとされる事実に関する記述〉と見做し議論を進めていく。

以上の問題設定を踏まえ、本論では以下のように論述を進める。まずモルらの主張であるルソーのモラリスト的歴史観というテーマを再検討し、いかなる理由で同テーマが導出されるのかを明確にする。次に『エミール』第四巻で議論の俎上に載るルソーのトゥキディデス評価を分析し、ルソーが要求する歴史家のあり方とはいかなるものであったかを検討する。この作業を通じて、我々は歴史家の権威という問題がこのテクストの裏に隠されていることを示す。最後にルソーの他のテクストに対して、我々が『エミール』の分析を経て明らかとなった歴史家のフィギュールがいかなる射程を有しているのかを示し、本稿を終える。

## II. 『エミール』における歴史批判

モルやゴルドシュミッドがルソーの歴史をモラリスト的歴史として位置づけた理由は、ルソーが事実の学として歴史を見ていなかったということにある。下に引用するのは『エミール』第二巻のルソーによる原注である。

古代の歴史家たちには我々に役立つ見識が豊かにある。たとえ、その見識を示す事実が間違っているとしてもである。ところで、我々は歴史を真に利用することを知らない。考証学的批判 [la critique d'érudition] は、事実から有益な知識を引き出ししうるのであればある事実が真実であることがくも重大であるかのごとく、すべてを使い果たしてしまう。良識ある人間は歴史を寓話の織物として見なすべきで、その寓話から得られる道徳は人間の魂に非常に適しているのである<sup>4)</sup>。

この原注は子供の食事法に関する件で、ヘロドトスの『歴史』に登場するリディア人の逸話をルソーが挿入する場面に付されている。ここでは二つの歴史が対置されている。ひとつが「考証学的批判」が対象とする事実としての歴史であり、もう一つが「良識ある人間」が論じる寓話としての歴史である。「歴史を真に利用する」とは、「寓話」としての歴史から「我々に役立つ見識」を多く得ることである。これが「良識ある人間」がなすべき歴史教育である。こ